

## 2024年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏名
教育学部 子ども発達学科	准教授	武 寛子
最終学歴	学位	専門分野
神戸大学大学院 国際協力研究科 博士課程後期課程	博士 (学術)	比較教育学

### I 教育活動

#### ○理念・目標・方針・計画（方法）

##### 【理念】

学生の視点にたち、学生の学びや経験が一步でも前へ進めるように寄り添う

##### 【目標】

学生が自身の興味関心のある分野について問題意識をもち、知識と理解を深められる教育活動を行う

##### 【方針】

学生との双方向的なやり取りを通じて、学生が自身の考え方を構築できるようにする

##### 【計画（方法）】

学生との双方向的なやり取りを重視したアクティブ・ラーニングを実施する

#### ○担当科目（前期・後期）

##### （前期）

教育社会学、教育原理、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ、総合演習Ⅰ

##### （後期）

教職概論、教育課程論、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、総合演習Ⅱ

#### ○教育方法の実践

アクティブ・ラーニング

#### ○作成した教科書・教材

教育社会学、教育原理、教職概論、教育課程論における教材資料の作成

#### ○自己評価

授業では、ロールプレイやアクティビティを取り入れたアクティブ・ラーニングによる授業を実践し、学生が様々な教育課題に主体的に考えられるような工夫を行った。

### II 研究活動

#### ○研究課題

スウェーデンの大学教育における内部質保証への学生参画－学生の評価リテラシーに関する研究

#### ○目標・計画

##### 【目標】

## スウェーデンにおける学生の評価リテラシーについて考察する

### 【計画】

スウェーデンにおける大学の職員、教員、学生へのインタビュー調査による定性的調査の実施

○2017年4月から2025年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

- (1) 山内乾史・武寛子（2024）『学校教育と社会』東信堂。
- (2) 山内乾史・武寛子（2024）『道徳教育と社会』東信堂。
- (3) 武寛子・澤野由紀子・山内乾史「比較教育学の研究倫理」山内乾史編『比較教育学の研究スキル』東信堂、pp.121-132、2019年1月。
- (4) 武寛子「スウェーデンの才能教育」山内乾史編『才能教育の国際比較』pp.53-69、2018年12月。

（学術論文）

- (1) 武寛子・山内乾史（2024）「スウェーデンの基礎学校における『いじめ』対策の動向」『佛教大学教育学部学会紀要』第24巻、pp.183-196。
- (2) 武寛子（2024）「スウェーデンの大学における学生の評価リテラシーとは何か—『学生の影響力』行使のために—」『高等教育研究』第27巻、pp.147-196。
- (3) 武寛子（2024）「スウェーデンにおける大学教育の内部質保証への学生参画—学生組合による学生代表ハンドブックの分析—」『比較教育学研究』69巻、pp.42-60。
- (4) 武寛子・山内乾史（2023）「幼児保育教育における子どもの『主体』の視点に関する比較分析」『佛教大学教育学部学会紀要』第23巻、pp.163-174。
- (5) 武寛子（2023）「道徳教育における人権の視点：『主体性』に着目して」『愛知文教大学教育研究』愛知文教大学教職課程研究センター、第14巻、pp.47-56。
- (6) 田中正弘・武寛子「学生が作成する評価報告書は内部質保証にどのように影響を与えているか—スウェーデンとイギリスの「学生意見書」を参考に—」『筑波大学教育学系論集』第46巻第2号、pp.1-16、2022年3月。（査読有）
- (7) 武寛子「自治体における人権教育基本方針に関する比較分析—人権教育とシティズンシップ教育に焦点をあてて」『国際協力論集』第29号第1号、pp.149-164、2021年7月。
- (8) 武寛子「多文化共生の実現に向けた自治体の取り組み」『比較文化研究』愛知文教大学大学院国際文化研究科紀要、第16号、pp.53-73、2021年3月。（査読有）
- (9) 武寛子「スウェーデンの大学における教育評価—授業評価のフィードバックによる内部質保証の考察—」『大学教育研究』神戸大学大学教育推進機構、第28号、pp.41-55、2020年3月。（査読有）
- (10) 武寛子「スウェーデンにおける学生参画による大学教育の質保証—『大学への影響力をもつ学生』の形成へ向けて」『比較教育学研究』日本比較教育学会、第56号、pp.46-67、2018年3月。（査読有）
- (11) 武寛子「教員養成系大学におけるIRに基づく教育改善方策に関する一考察—HATOプロジェクト・IR部門による調査結果から—」『日本教育大学協会研究年報』日本教育大学協会、第36集、pp.1-11、2018年2月。（査読有）
- (12) Take, H. and Shoraku, A. Universities' expectations for study-abroad programmes fostering internationalization: Educational policies, *Journal of Studies in International*

*Education, Association for Studies in International Education, Vol. 22 (1), pp. 37-52, 2017*  
年 8 月.

(<https://journals.sagepub.com/doi/full/10.1177/1028315317724557>) (査読有)

- (13) 杉野竜美、正楽藍、武寛子「大学生の視点から見る海外留学・国際交流プログラムの課題—スキルの向上から資質の昂揚に向けて—」『香川大学インターナショナルオフィスジャーナル』香川大学インターナショナルオフィス、第 8 号、pp.1-13、2017 年 5 月。  
(査読有)
- (14) 正楽藍、杉野竜美、武寛子「大学の国際化における海外留学支援制度 —留学促進に向けた教育体制の構築に向けて—」『大学教育研究』神戸大学大学教育推進機構、第 25 号、pp.103-119、2017 年 3 月。(査読有)

(学会発表)

- (1) 武寛子「スウェーデンの内部質保証における学生の評価リテラシーとは—学生・学生組合・教員・職員の視点から—」『日本比較教育学会』第 60 回、於名古屋大学。
- (2) 武寛子「スウェーデンにおける大学ガバナンスへの学生参画」『日本比較教育学会 ラウンドテーブル 日本における大学ガバナンスへの学生参画の可能性—デンマーク、スウェーデン、イギリスとの比較の視点から』第 60 回、於名古屋大学。
- (3) 武寛子「スウェーデンの大学における学生の評価リテラシーの養成」『日本比較教育学会』第 58 回、於東北大学、2022 年 6 月。
- (4) 田中正弘・武寛子「学生が作成する評価報告書は内部質保証にどのような影響を与えているか—スウェーデンとイギリスの『学生意見書』を参考に—」『日本比較教育学会』第 57 回、於筑波大学、2021 年 6 月。
- (5) 武寛子「スウェーデンの大学におけるグローバル化と国際理解」『日本国際理解教育学会』第 29 回、於椛山女学園大学、2019 年 6 月。
- (6) 武寛子「スウェーデンの大学における教育評価による質保証」『日本比較教育学会』第 54 回、於東広島芸術文化ホールくらら、2018 年 6 月。
- (7) 武寛子「スウェーデンの大学における新しい内部質保証枠組に関する考察」『東海教育社会学研究会』第 88 回、於名古屋大学、2017 年 8 月。
- (8) 武寛子「スウェーデンにおける学生参画による大学教育の質保証」『日本比較教育学会』第 53 回、於東京大学、2017 年 6 月。

(特許)

該当なし

(その他)

【寄稿】

- (1) 武寛子「スウェーデンの大学における新自由主義改革と学問の自由」『北ヨーロッパ研究』北ヨーロッパ学会、第 18 巻、pp.1-9、2022 年 6 月。
- (2) 武寛子「スウェーデンにおける新自由主義政策下の学校と『いじめ』問題への対応」『おおさかの住民と自治』大阪自治体問題研究所、特集第 114 号、pp. 8-13、2022 年 5 月。
- (3) 武寛子「スウェーデンにおける高等教育のグローバル化と国際化政策」ウェブマガジン『留学交流』Vol.85、pp.14-24、2018 年 4 月。

### 【辞典項目】

- (1) 武寛子「市民社会と国際教育協力」日本教育社会学会編『教育社会学事典』丸善出版、pp.764-765、2018年1月。

### 【調査報告書作成】

- (1) 大学基準協会大学評価研究所（2024）『質保証における学生参画のあり方に関する調査研究報告書』学生参画のあり方に関する調査研究部会。

### ○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- (1) 日本学術振興会 科学研究費 基盤研究（C）  
「スウェーデンの大学における内部質保証に参画する学生代表養成に関する実証的研究」（研究代表者）（2,900千円）（2025年度－2028年度）
- (2) 日本学術振興会 科学研究費 基盤研究（C）  
「いじめ問題における「四層構造モデル」の再検討－北欧との比較を通じて－」（研究分担者）（研究代表者：山内乾史）（分担額未定）（2025年度－2028年度）
- (3) 日本学術振興会 科学研究費 基盤研究（B）  
「大学ガバナンスへの学生参画 学生の役割と得られる利益に着目して」（研究分担者）（研究代表者：田中正弘）（500千円）（2024年度－2028年度）
- (4) 日本学術振興会 科学研究費 特別研究員奨励費  
「スウェーデンの大学における学生の評価リテラシー養成に関する実証的研究」（研究代表者）（2,860千円）（2022年度－2024年度）
- (5) 日本学術振興会 科学研究費 若手研究（B）  
「スウェーデンの大学における内部質保証の研究－『フィードバックと改善』機能の解明」（研究代表者）（2,600千円）（2017年度－2022年度）

### ○所属学会

日本比較教育学会、日本高等教育学会、日本教育学会、日本教育社会学会、日本国際理解教育学会、

### ○自己評価

科研費の研究課題を順調に遂行することができた。また、科研費の研究課題以外にも、学校安全に関わる「いじめ」問題や、道德教育、教育と社会に関する論文や書籍等を刊行し、教育分野全般にわたる研究活動に従事した。

## III 大学運営

### ○目標・計画

#### 【目標】

大学の研究活動および国際交流の発展に貢献する

#### 【計画】

研究活動や国際交流に関する委員会を通じて、自身の役割を発揮する

### ○学内委員等

国際交流委員会、研究活動委員会、研究倫理委員会

#### ○自己評価

国際交流委員会では、**International Festival** においてスウェーデンのポスターを作成したり、お菓子や遊びを紹介したりした。東邦高校の留学生と一緒にブースを担当し、高校生がポスター準備をするにあたって大学との仲介役を担った。

海外研修の情報についてゼミ内で共有を行い、情報の発信に努めた。

研究活動委員会や研究倫理委員会では、倫理審査が速やかに行われるように対応した。

#### IV 社会貢献

##### ○目標・計画

###### 【目標】

教育研究活動の実績を社会に還元する

###### 【計画】

スウェーデンの大学における学生参画、学生の評価リテラシーに関する研究成果を、学会誌やシンポジウムなどを通じて還元する

##### ○学会活動等

2024 年度 国際理解教育学会選挙管理委員会

###### 【依頼公演】

武寛子「スウェーデンにおける新自由主義大学改革と学問の自由」『北ヨーロッパ学会 共通論題（一般公開）「北欧諸国の高等教育における学問の自由と研究体制」』2021 年度研究大会、於名古屋工業大学、2021 年 11 月。

##### ○地域連携・社会貢献等

- (1) 大学基準協会 教育評価研究所「質保証における学生参画検討小委員会」構成員（2024 年 10 月 1 日～2027 年 3 月 31 日）
- (2) 大学基準協会 教育評価研究所「質保証における学生参画の在り方に関する調査研究部会」構成員（2023 年 4 月 1 日～2024 年 9 月 30 日）
- (3) マイナビ社員への論文執筆講座およびコンサルタント

###### 【研究成果還元活動】

Take, Hiroko. and Kettis, Åsa(2024) “What is students’ assessment literacy at internal quality assurance in Sweden? – From the perspectives of students, staff and faculty” , *Feedback Seminar*, at Division for Quality Enhancement, Uppsala University, September 6<sup>th</sup> 2024.

###### 【依頼公演】

- (1) 武寛子（2024）「スウェーデンの大学における教育研究の多様性と包摂性ーすべての学生・教員・職員のために」『早稲田大学 FD カフェ』於早稲田大学大学総合研究センター、2024 年 12 月 13 日。<https://www.waseda.jp/inst/ches/news/2024/11/07/6117/>
- (2) 武寛子（2024）「スウェーデンの大学における学生参画の歴史と学生の評価リテラシー～学生参画を支える基盤」『全国私立大学 FD 連携フォーラム』於龍谷大学深草キャンパス。

## ○自己評価

大学基準協会大学評価研究所によるプロジェクトや他大学におけるFDにおいて、これまでの研究活動の成果を還元することができた。また、現在客員研究員として所属しているウプサラ大学(スウェーデン)でも、研究成果のフィードバックセミナーを実施することができた。これらの活動を通して、研究成果を国内外に発信した。

## V その他の特記事項 (学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等)

国際的な場においても自身の教育研究活動を発信できるように、英語運用能力を高める

## VI 総括

教育研究ともに、目標を達成することができた。教育面では、学生が主体的に学べるように双方向的な教育実践を行った。研究面では、科研費の研究課題だけでなく、学校安全に関わる「いじめ」問題、道徳教育、社会と教育に関する論文や書籍の出版を行った。地域への社会貢献に関しては、大学基準協会による研究プロジェクトへの参加や他大学におけるFD活動、スウェーデンでのフィードバックセミナーを実施し、これまでの研究成果を国内外に還元した。

以 上